

小山田宏一先生のご退職にあたって

小山田宏一先生が奈良大学文化財学科にご着任くださったのは、5年前の4月のことだが、実は先生と私はお互い前職の立場で、それ以前にもお会いしていた。

いちばん印象に残っているのは、私が学芸員として採用されてまだ間もなかったころ、小山田先生が徳島県内の古墳から出土した青銅鏡の実見にお越しになった際のことである。

その青銅鏡は、粉々に破碎されていて、たりない破片もあり、展示台の上に元の形がわかるように破片を並べて展示していた。展示ケースから取り出して実見していただいた際、破片の配置が違うのではないかかというご指摘をいただいた。

私の所属していた博物館では、考古担当の学芸員が、発掘後に出版されていた報告書の写真を元に、破片を並べて展示していたので、その配置に何の疑いも持っていなかったため、とても恥ずかしい思いをしたと同時に、これまでのことにとらわれすぎて新しい見方を忘れてはいけないということを身をもってお示しいただいたことに感謝したことを今でも強く覚えている。青銅鏡は、その後すぐに破片の配置を改めて展示し直したことは言うまでもない。

それから20年近くが経過していただろうか。私が母校の文化財学科に転出して3年が過ぎたころ、博物館学芸員資格関係科目のご担当者の後任を選定する際に、小山田先生のお名前があがった。

恥ずかしながら、前述のエピソード以来、先生とお仕事する機会がなかったためお会いすることもなく、完全に忘れ去っていたが、久しぶりにお名前をお聞きして、件のエピソードについても思い出し、先生と同僚としてお仕事できることを喜んだ。

あれから早5年の月日が経ち、小山田宏一先生はご定年を迎えられることになってしまった。こんなことなら、もっと先生からさまざまなことを教えていただく機会をつくっておけばよかったと思う後悔はもちろん先に立たずである。

昨年来のコロナ禍で、海外研修にも行けなくなってしまったが、幸いにして小山田先生とともに学生を引率して、2019年に中国への海外研修に行けたことが今となっては最高の思い出となっている。

誰とでもとてもフランクに接してくださり、たばことお酒が大好きで、お酒の場では、若者のようにはしゃがれる小山田先生は、一見すると、考古学者によくある陽気なおじさんのようであるが、いざ研究の場面や、博物館のお仕事となると、何事にも真面目に正面から取り組まれていた姿勢が私の中に強く残っている。

短い間ではあったが、奈良大学文化財学科の学生たちと真摯に接していただき、おそらく学生たちも、昔の私のように先生から多くのことを学び取ってくれたことであろう。

小山田先生のこれまでの学恩に感謝するとともに、先生のこれからの日々が幸多きものであることを祈り、先生をお送りすることばに代えたい。

2021年3月吉日



2019年中国・蘇州にて

魚 島 純 一